

## 170. 信楽焼編年の覚え書

信楽焼の編年について私の考えるものは、県立近江風土記の丘資料館の本年度(1989年度)秋季特別展『中世の信楽』の冊子<sup>註①</sup>に編年図と共にその概要を記述してある。そこでは中世の信楽について開窯期(13世紀末葉)から近世<sup>註②</sup>前葉(17世紀)まで、中世陶器の基本的セットである壺・甕・鉢の形態的变化などからI～X期の10期に分類している。その大要は、壺・甕類は主に口縁部の縁帯部の変化、縁帯が頸部から離れた形から頸部につく形態へ、また全体のプロポーションが頸部のすばまったものからずんどう形に変化するものである。鉢とりわけ播鉢については、すり目のない所謂、捏鉢から播鉢へ、さらにすり目の量的拡大と全体の形状変化である。これらの個々の変化とその組合せの変化とがその内容である。

本稿は同冊子で聊かも触れておらぬ、従って多分に唐突である信楽焼の開窯の事情について、信楽の初期の甕を通してその見透しを記述するものである。

### 初期信楽について

ここでいう初期信楽とは、私の考える信楽の開窯期である13世紀末葉代から14世紀前葉代<sup>註③</sup>の信楽としての特徴を十分に確立していない段階のもの、編年表のI期とII期前半のものを指している。本稿では、その出土状態などの観察・考察を行い、そこから信楽焼は近江佐々木氏の庇護の下に開かれたものであり、その技術的系譜は、瓷器系中世陶器、具体的には常滑・越前・丹波焼の系譜に属し、それら信楽に先行する中世陶器生産地の工人が指導、恐らく直接その工人が佐々木氏により招請されて開窯されたものであることを述べるものである。

### その受容につて

伝世品を除き、近江で初期信楽の甕が出土しているのは窯跡としては、長野・二本丸窯跡、神山14号窯跡、宮町6号窯跡、黄瀬・ハンシ窯跡、やや不安定な要素もあるが、長野・南松尾窯跡があり、遺跡としては、管見であるが、彦根市妙楽寺遺跡、近江八幡市金剛寺遺跡、同千僧供遺跡、日野町小御門遺跡、同松尾遺跡、同大谷古墓、安土町十七遺跡、守山市横江遺跡、同杉江遺跡、栗東町総遺跡、大津市坂本遺跡、中主町光明寺遺跡、大津市仰木古墓などが挙げられる。これらの

窯跡を除く遺跡では、甕についてはより古い段階では常滑製品が使われているが、初期信楽の出現以降はそれが漸減する遺跡と全く存在しなくなるものとに分れる。それは信楽窯との距離により分れるとみられる。つまり、やや遠隔である彦根市妙楽寺遺跡は前者の例であり、近江八幡市金剛寺遺跡は後者の例である。しかし、この距離による分類は恐らく単なる現象面による相異であり、本質的にはその消費者の性格の相異にあるのであろう。いずれにしても信楽甕は常滑甕を駆逐する形、常滑の占有していた位置を信楽が占める形となる。常滑・越前などの中世陶器、とりわけ大型の甕などは窯での歩止りが悪く製品量は限定されていた。事実遺跡などの出土例ではかなり変形した粗悪な製品が往々にしてみられ歩止りを少しでも多くする必要が存在していたことを窺わせる。その上、遠隔地への運送には多くの労力を必要とし、関銭などの必要経費も加わることを考えあわせると当時はかなり高価なものであったと推察される。従って、これら常滑などの大型甕を入手、使用するのにはかなり富有的な、限定された階層の人々であったとい得よう。上記の遺跡では、例えば守山市の横江遺跡がそうであるように、企画性のある大規模な区画での居住形態の遺構が検出されており、それは一般の集落とはやや懸け離れた集落であることから、恐らくかなり富有的な輩の生活跡で、そこに住む者は在地土豪の性格を有する一族であるとい得、上記の推測を裏づけられるものと思われる。また上記の遺跡中には、近江佐々木氏の本拠地の一つである、近江八幡市金剛寺遺跡が存在する点からもそれは肯定できよう。従ってこれらの遺跡は在地土豪の、時期的にみて在地武士団の居住地であったとみて良いようである。即ち、初期信楽の受け手は近江では在地土豪層、在地武士団であったと見做されよう。

### その開窯について

以上初期信楽の大型甕について受容状況を観察し、消費者について推察したが、次いで初期信楽の製品について、その源流はいずれにあって如何なる工人がそれらをつくったかについて考察してみよう。

開窯地について上述した如く、初期信楽の窯地として4窯跡を挙げたが、これらの製品、あるいは伝世品、出土品の当該期の例を図示したのが、図であり各窯跡の位置を表わしたのが分布図である。この位置図、窯





跡の立地を一覧すれば明らかな如く、初期信楽は信楽町の北部黄瀬・宮町地区、同中央部の長野地区、同西部の神山地区の3地点にあり、その初期の段階から略々後代の窯跡と重複する地点で開窯されている。因みに、これら3地点で使用された陶土はそれぞれに特徴があり、それを簡単に記述すれば、やや砂分の多い北部黄瀬・宮町地区、長石分の多い中央部長野・勅旨地区、より粘土質の西部・神山地区という分類になるが、かように信楽の各所、後代にも引き続き営窯される地域の全域にその初期の段階から営窯されている点は、信楽が小規模に点として開かれ、そこから拡散したとする従来の信楽窯観を払拭させるものである。信楽焼はその当初から大規模に営まれたものであり、それは分布状況などから見て、かなり計画的な窯場の形成であったのである。

#### その技術的系譜について

信楽の開窯状況について観察してきたが、次に、それらの初期信楽の技術的系譜について言及してみよう。

図に示した初期信楽の甕を一覧すれば明らかな如く形態的には常滑、越前、さらに、丹波各窯のそれに類似する。以下、個々具体的にその形態の諸要素について観察してみよう。

No. 2～6は直立する頸部に「」字形の口縁縁帯をつくり、肩部は怒り肩であり明らかに常滑のそれと同一である。No. 3も同様に常滑の甕にその範をもとめている。No. 7は頸部が極めて短くそして強く外側に屈曲する。口縁部自体は常滑系の幅広い縁帯であるが、常滑にはかような頸部の形を示す例は少なく、越前にその傾向の甕はあるもののこの特徴的な口縁部形態は丹波によく発達するものであり、事実、床谷窯出土の甕 (No. 13) に本例に類似する幅広い縁帯を持つ甕がある。本例は丹波の系譜を持つ甕といえよう。この頸部の短い鋭く屈曲する甕はNo. 8の近江八幡金剛寺遺跡出土例もあるが、これはむしろ、越前の甕にも近く、越前系というべきであるが胴部以下は常滑のそれであり折衷形といえる。No. 6は縁帯の形、頸部の立ち上りからみて常滑の系統である。また、No. 9、10の宮町6号窯跡の例は常滑形であるが、この宮町6号窯跡の甕の焼き上りは降灰釉のそれも含めて丹波の焼き上りに類似している。各地の中世陶の一見してわかる産地の相異はその焼き上りにあり、それ自体は恐らく、陶土のみの違いではなく窯構造、焼成法の違いとみられることから、この宮町6号窯跡では焼成法自体が丹波のそれに範を持っていた可能性がある様におもえる。因みに、時期は降るが周辺の金山窯跡で出土してい

る陶器に丹波と見紛う陶土・焼成を示すものがあり、この周辺の窯跡に丹波との緊密な関係があることを示している。No. 2は黄瀬ハンシ窯跡の出土で常滑に類似する。No. 1は長野二本丸窯跡の出土例で越前に類似する。この他、大型の甕ではないが三重県仏土寺出土の甕に越前のそれと同一の形態を持つものがある。因みに、同寺出土の小型壺は胎土を除き形態、技法、肩部の刻印（この刻印自体は越前にはみられない<sup>注①</sup>）とのことだが）など、全ての要素を越前にもとめたものであり、越前とも深い関連があることが判明する。No. 4、5は神山14号窯跡の出土例で常滑形である。No. 11は伝世品で、口縁部は常滑に、それ以下は越前の特徴を持つ甕である。これが信楽であるとすれば宮町6号窯跡のNo. 9と同一の口作りであることから同窯跡の製品であるとみられる。

以上の甕の整形・調整法では指によるナデ、あるいはヘラナデ、刷毛状工具によるナデなどがみられる。例えばNo. 9、10の甕では刷毛状工具による整形が特徴的であるが、これは常滑や丹波に目立つ工法である。またNo. 2では常滑・越前型の肩部への叩き目がみられる。

以上主にその形態の特徴から初期信楽の特にその甕の作手を考察して来たのだが、そこからは初期信楽の

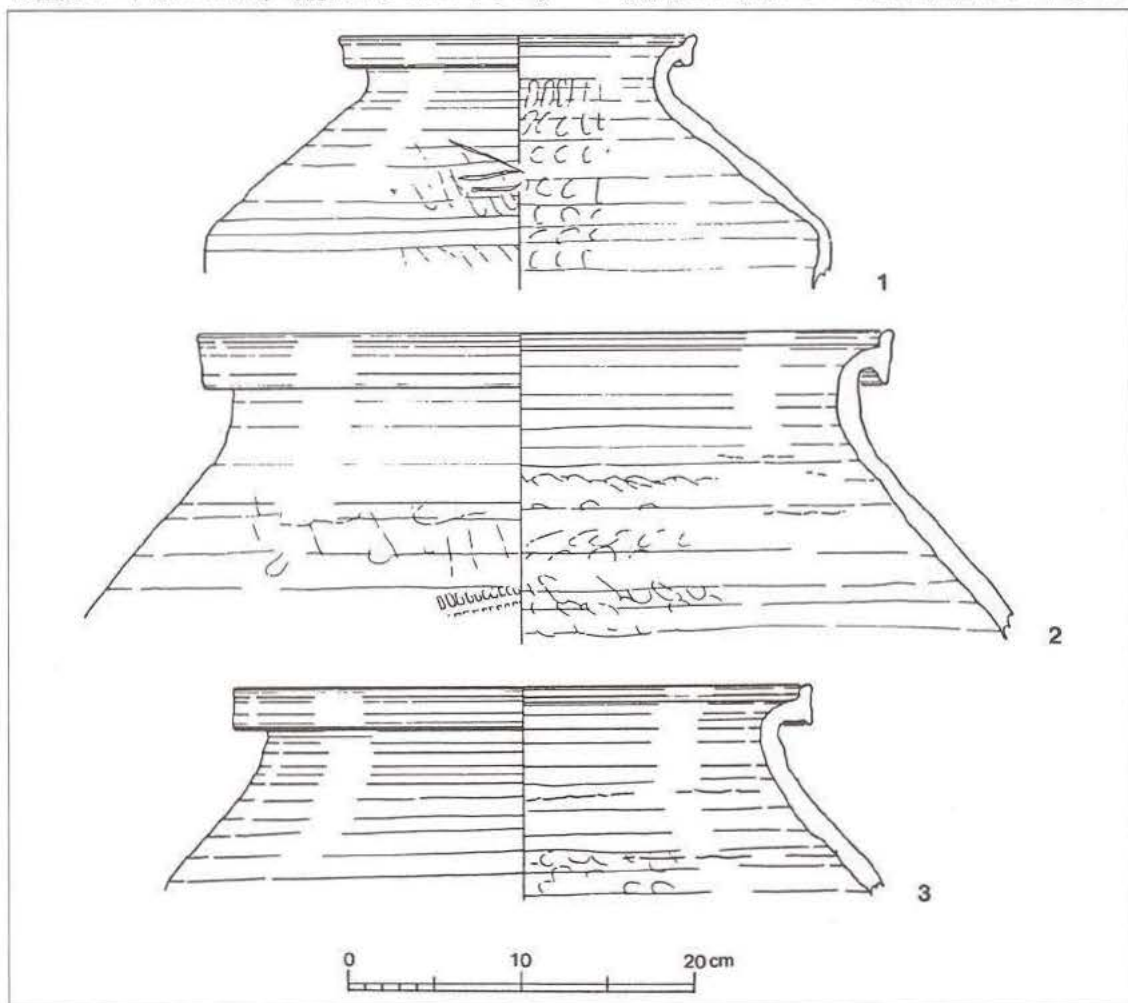
荷い手が常滑・越前・丹波各窯の影響下の工人であったことが推測される。これら初期信楽の甕は、あるいは他の器種についてもいえる事であるが、極めて手慣れた作手であり、かなり熟練した工人の手になるとみられる。これは初期信楽の工人が本来その製作に携わってきた工人である事を示しており、例えば瓦工など、他の業種の工人が転業した場合明らかにそれとわかる作手となるのだが、初期信楽はその様な未熟な作手ではない。また信楽の開窯は在地須恵器工人の転換とみる説<sup>18)</sup>もあるが、焼成法の違い・瓷器系の陶業である事、後にも述べるが小規模な窯場形成でない事などからみて信楽は須恵質陶器の流れ、工人によるものではないとせねばならない。初期信楽の製品の焼上り・形態共に熟成されたもので専門の工人の手になるものであり、さらにそれらが常滑・越前・丹波各窯の製品に酷似するものである事から、恐らく初期信楽の工人とは上記のいずれかの工人、可能性としてはこちらの方

が強いのだが、上記3窯の工人が直接信楽に移入され、製窯・製陶を行ったと考えられるのではないだろうか。

初期信楽を焼成した窯跡は、神山14号窯跡・長野二本丸窯跡・黄瀬ハンシ窯跡・宮町6号窯跡があるが、それを上記の窯業地の製品と比較すると神山14号窯跡の製品は常滑に、二本丸窯跡は越前に、ハンシ窯跡は常滑に、宮町6号窯は常滑、越前、丹波にそれぞれ類似する。従って、信楽の開窯時には単純な、例えば、越前の工人のみによる築窯・製陶ではなく上記の3窯業地の工人が招来されて信楽焼を形づくったと考えられる。

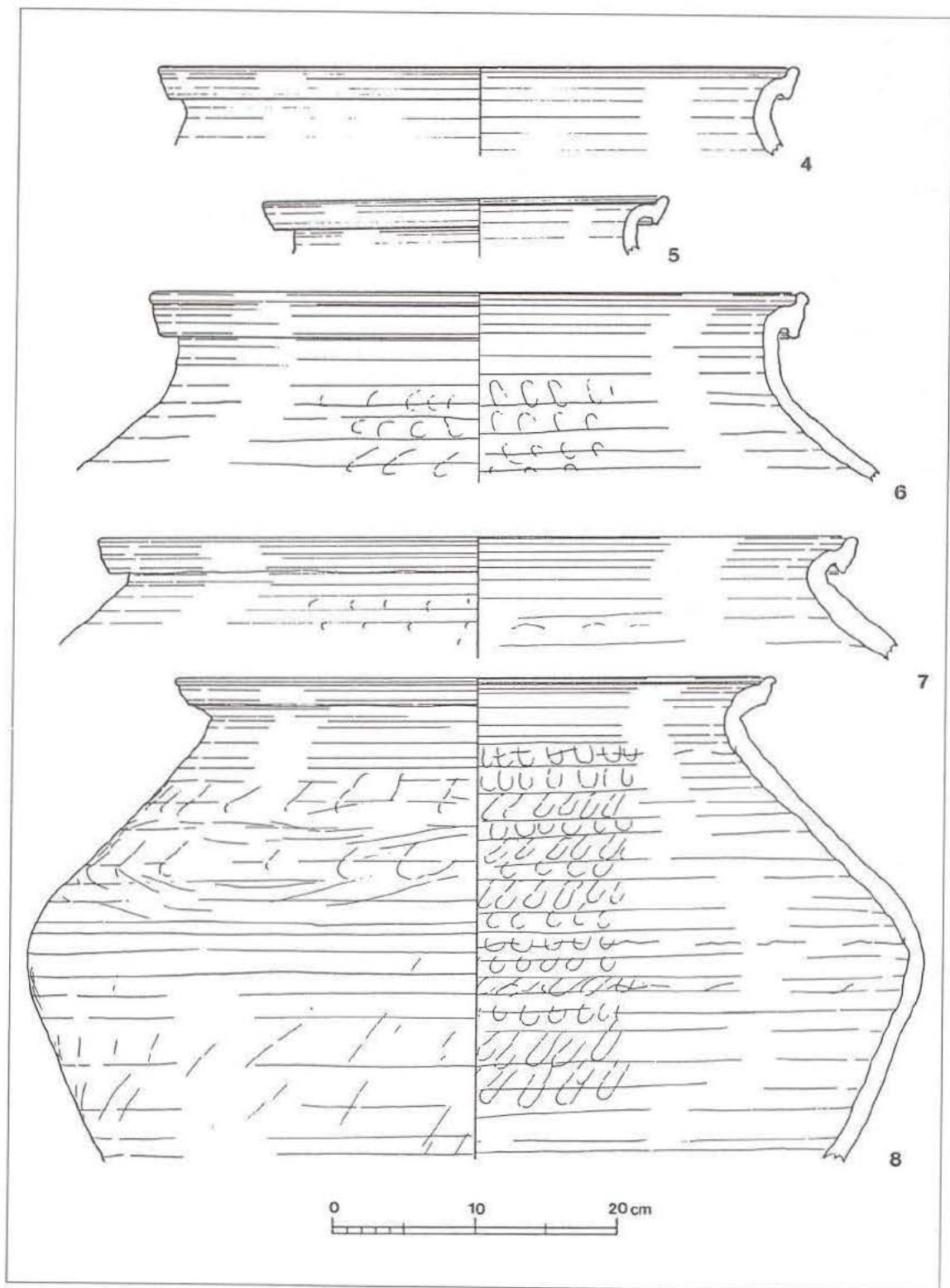
#### まとめ

これまでの諸要件をまとめてみると、①初期信楽の遺跡での出土例は信楽に近縁の蒲生郡・野洲郡・栗太郡・甲賀郡・志賀郡である。②それらの遺跡は遺構・遺物からみて在地の有力者層の居住する地であり、その有力者とは時期からみて在地武士団であり、③それ

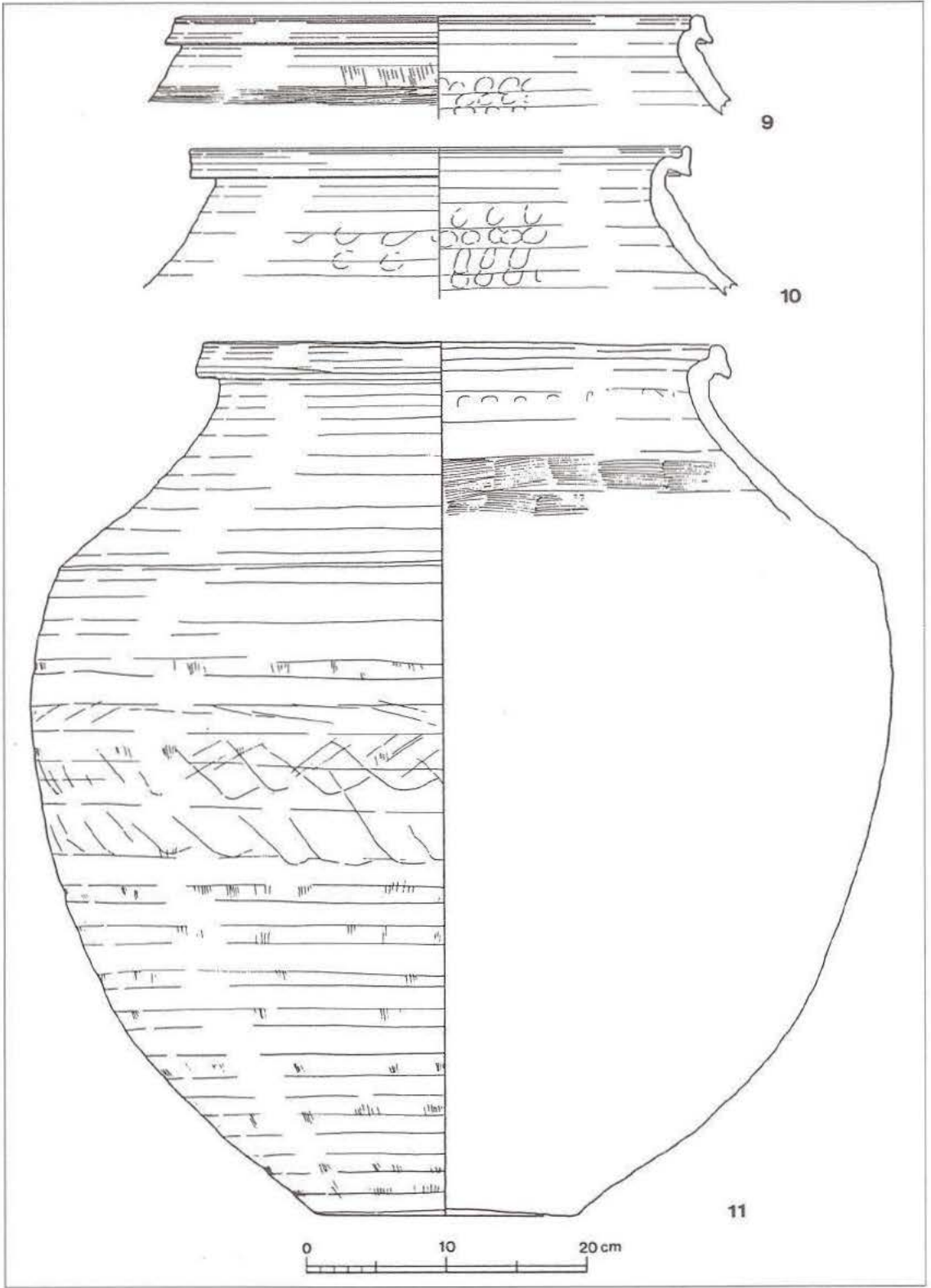


1. 二本丸窯跡 2. ハンシ窯跡 3. 守山市・横江遺跡出土品

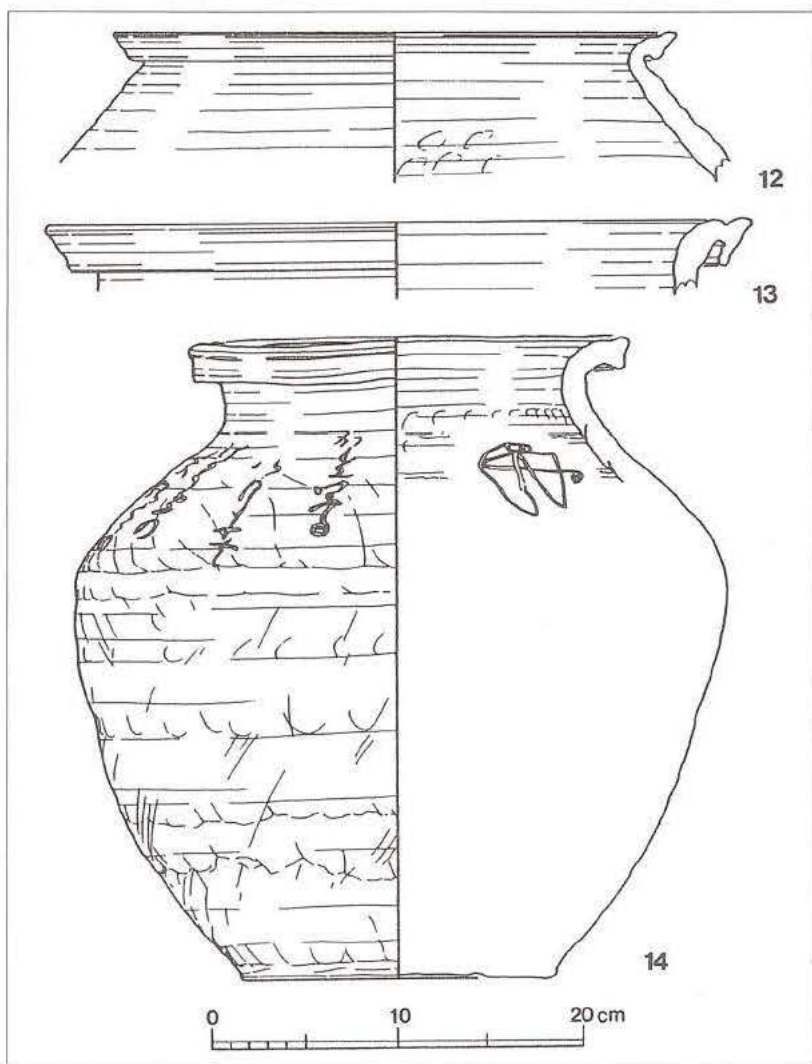




4. 5. 神山 4 号窯跡 7. 信楽町・勅旨古墓 8. 近江八幡市・金剛寺遺跡出土



9.10. 宮町6号窯跡出土 11. 伝世品



12. 丹波・稻荷山窯跡 13. 丹波・床谷窯跡出土 14. 越前・「嘉元4年」銘壺

は近江の最有力武士団・守護でもある佐々木氏に関連する一団である。①信楽の開窯期＝初期信楽の窯跡は後代の信楽の窯跡と略々その分布を一致させるもので、それは北部の黄瀬・宮町地区、中央部の長野地区、西部の神山地区で、㊦殆んど時を隔てずに一斉に開窯された大規模なものであった。②その工人は当時の先進窯業地である常滑・越前・丹波各窯跡の工人とみられ、信楽焼は植崎彰一の分類による瓷器系窯業地・陶器で、その当初から壺・甕・鉢を焼成していた。などが挙げられる。

こうして信楽焼が当初から大規模な窯場を形成している点、あるいは先進窯業地の技術・人手が動員されている点、初期の需要地が一定のまとまりを持つ点などからみてかなり大きな力・財力を含めた一を有した者による窯場づくりとみてさしつかえないであろう。

近江における当時、13世紀の有力者とは言うまでもなく近江佐々木氏であり、それは初期信楽の分布からも推定される事でもある。即ち、近江に幡居する雄族、佐々木氏こそは信楽開窯の後盾であり、またその利益の享受者であったのである。恐らく、この関係は佐々木氏が観音寺城を明け渡し16世紀後半まで続き、その後は織田信長・豊臣秀吉、そして略々全国の陶器の形態が統一される徳川家康の代へと変貌する事となる。それらについても記述せねばならぬが紙幅も尽きたれば、以上の見透しの肉付けや信楽のII期後半以降の諸問題と共に次稿に述べる事としよう。

本稿の作成にあたっては各陶器の所蔵者、保管者の方々をはじめ、多くの方々の学恩を受けた。末筆であるが深い感謝の意を表わしたい。ありがとうございました。なお本稿は平成元年度科学研究費奨励研究(B)「信楽の編年について」の成果の一部である。

(松澤 修)

#### 注

- ① 近江風土記の丘資料館『中世の信楽』1989.
- ② 近世の境を何処におくか論があるが、本稿では江戸時代をその境とする。
- ③ 信楽の開窯期についてはこれまでに多様な説がある。大きくは平安時代後期説、鎌倉後半説があるが私は後者の説を採る。詳細は別稿を用意している。
- ④ 福井県陶芸館の田中照久氏に教示を得た。
- ⑤ 秋田裕毅 「信楽の成立と変遷について」(『注①書』) 河原正彦 「信楽」(『世界陶磁全集3 日本中世』 小学館 1977)